



放送大学

東京足立学習センター <https://www.sc.ouj.ac.jp/center/adachi/>

2019
3.31 No.59



放送大学東京足立学習センター機関誌

葦立

あし
だち

【発行日】2019年3月31日

【発行】放送大学東京足立学習センター

〒120-0034 東京都足立区千住5-13-5

学びピア21(6階)

TEL.03(5244)2760 FAX.03(5244)2762

【編集】葦立編集室



荒川(西新井橋付近)

Contents

● 退任の挨拶	2P
● 退任の挨拶	3P
● 退任の挨拶・就任の挨拶	3P
● 学生研修旅行	4P
● 通信指導について	6P
● 面接授業のごあんない	6P

退任の挨拶

放送大学東京足立学習センター所長

柴 眞理子



5年前の4月に東京足立学習センター所長に就任し、この3月末で退任となります。この5年の月日は短いようで長い、長いようで短い、複雑な時間の流れを感じつつ、過ごしてきました。ここで過ごす時間が残り少なくなるに連れ、いろいろな出来事が懐かしく脳裏に浮かび上がってきます。

通信制の大学ですので、学生のみなさんと出会うのは、入学者の集い、学位記授与式、面接授業、単位認定試験等、限られた時間ではありましたが、それぞれの場で、みなさんの学びへの意欲、学びへの態度に新鮮な驚きともいふべきものを感じておりました。

センターを去るにあたり、客員教員の先生方、同窓会のみなさん、センターの事務職員のみなさんの大きなご協力で感謝しながら、共に活動してきた事柄のいくつかを記しておきたいと思います。

【面接授業】

放送授業はご自宅や通勤途上等で、一人で授業に向きあい、じっくり一人で考えるタイプの学びで、ある意味、孤独であるのに対し、面接授業は講師と学生が一同に会し、その場でリアルタイムに質疑応答が展開されるタイプの学びで、他者と関わり共に考えることを通して自分とは異なる感じ方、考え方、行動の仕方があることを体験的に知るといった特徴があります。学習センターの役割の大事なものの一つが、この面接授業の企画・運営で、学生の学びへの意欲を刺激し、積極的な受講を願って、面接授業の学生アンケートを読み、講師の先生方に授業後の感想を伺い、また、客員教員の先生方に講師をご推薦いただき、私自身がこれはと思う方に講師をお願いしたりしながら企画してきました。履修希望者が定員を上回って抽選になる科目もありましたが、講義室が狭いため定員を増やすことが難しく、抽選に外れた学生には申し訳なく思います。また、逆に、時機を得たテーマや領域のバランスを考えて新設した授業科目の中には履修希望者が少ない科目もあり、それはとても残念で、そこには新設科目の授業内容とその魅力をどのように伝えるかという課題が残りました。このように新設科目の履修状況には多少のバラつきがありましたが、多領域の先生方と交流しながらの面接授業の企画は、知的好奇心を大いにそそられる心躍る仕事でした。学生のみなさんが面接授業にワクワクドキドキし、それが知的好奇心向上に繋がったなら望外の喜びです。

【研修旅行】

面接授業や単位認定試験時にはある緊張感をもって真剣に学ぶ学生の姿が印象的であるのに対して、年に一度の研修旅行では、リラックスした学生同士の交流にあたたかな空気が印象的でした。研修旅行は、放送大学学生助成金を得て各学習センターで企画・実施されるもので、毎年、センターのスタッフが研修にふさわしい場所を色々調査し、研修先や昼食会場を決めています。この5年間の研修先は、・2014年度「横浜開港資料館」「横浜ユーラシア文化館」「横浜都市発展記念館」昼食は中華街・2015年度「製粉ミュージアム」「こころみ学園」昼食はあしかがフラワーパーク・2016年度「日産ヘリテージコレクション」「オギノパン」・2017年度「富士山世界遺産センター」「盲導犬の里」昼食は山梨名物ほうとう・2018年度「筑波研究学園都市(地図と測量の科学館、サイエンス・スクエアつくば他)」でした。毎年、それぞれの研修先でもっと時間をかけて展示物をみたり、学芸員の方のお話を聞きたいという感想があり、中には研修旅行の後、個人で再びその研修先に赴き、たっぷり時間をかけて見聞したという学生からの報告もありました。このように、一人ではなかなか行き難い所を複数研修先に設定し、それが個人で再び訪れる契機になればと考えておりました。

バスの中や昼食時には、研修旅行で初めて知り合ったにも関わらず、同じ放送大学の学生としてすぐに打ち解け、どのような放送授業や面接授業を履修しているのか、また、試験勉強の方法をどのように工夫しているのか等をお互いに披露している声が聞こえ、ここにも研修旅行の意義を感じました。

まだ研修旅行に参加したことのない学生のみなさん、研修旅行に参加してみませんか。

【同窓会との連携】

同窓会には、センターや大学の行事の際に色々な面でご支援、ご協力をいただいています。特に、入学者の集いの後、同窓会主催の茶話会は、初めて放送大学に入学した学生にとって、対面で様々な情報を得られる貴重な場となっています。その場には客員教員の先生方も参加なさって自由に語らうこともできます。放送大学の同窓会の特徴は、卒業生と共に、在学生(卒業した後、再入学)の会員の方も多くいらっしゃることです。従って放送大学での学びに長けている方々のお話を聞くことができるのですが、お話し下さる同窓会の方から、自分たちも質問を受ける中で、気づいていなかったことに気づくことがあり、勉強になるという感想もうかがっています。同窓会には、パソコン初心者支援でも大変お世話になりました。同窓会に1人でも多くの卒業生が入会され、センターとの絆を深めていただきたいと思います。

入学者の集い、学位記授与式での挨拶、また同窓会誌「あしだち」への寄稿にあたっては、その時々、今、私はみなさんに何を伝えたいのか、何を問いたいのかを自問自答して参りました。

最後に、学び続けるみなさんに、私の好きな次のゲーテの言葉を贈ります。

「あることをただ眺めているだけでは、少しも先に進むことはできない。よく観ることは考察へ進み、その考察は思考へ、思考は統合へと移行していくのだ」

退任の挨拶

放送大学東京足立学習センター客員教授

秋山 光文



30年近くを過ごした本務校の定年退職を間近に控えたころ、前センター長の富永典子先生にお声をかけて頂き東京足立学習センターの客員教授として着任してから、早いもので5年の月日が流れようとしています。寡聞にして、放送大学の授業について全く予備知識を持たず、これから先どのように授業を組み立てるべきなのかを模索しながら入学式に臨みました。会場の足立区生涯学習センター4階の講堂には、実に幅広い年齢構成の方が集まっておられ、これまでに味わったことのない緊張感に包まれたことを今でも忘れることが出来ません。学生の皆さんとの授業を通じてお目にかかったのは、同じ年の8月に2回開催された公開講座と同窓会主催の公開講演会でした。それまであちこちの文化講座で、生涯教育との関わりは経験済みとの認識ではありましたが、インド初期仏教美術の流れという極めてマニアックな授業内容であったにも拘わらず、パワーポイントの画像の1点1点、黒板に書いたメモ書きを1字も書き漏らすまいと懸命にノートを取る母の年齢に近い受講生の真剣な眼差しに、思わず休憩時間を忘れそうになるほど圧倒されていました。

就任初年度の秋からは、自主ゼミのテーマとして「仏教の説話と美術」を選び、インドの初期仏教經典に記されたブッタの前世と生涯にまつわる物語をもとに、經典の成立時期と説話図像の変遷の相関を検証する授業を展開し、5年間で15の主題を扱いました。内容的には極めて難しい授業であったと思いますが、出席者の中に大学時代の後輩が参加していたのには大層驚きました。40年余り務めた会社をリタイアしてからは、仏教文化の原点を知ろうとあちこちの公開講座を受講していたとのこと。その過程で小生の受講生になったのは全くの偶然であったようです。

就任の翌年から都内にある美術館の館長職という仕事が始まり、毎週4日間の勤務日と調整しながらの開講日設定には苦労しました。毎年の連休明けの週末に設定した「面接授業」では、インド仏教美術史の概説を2日間8時間連続の集中講義で実施しました。さすがに疲れましたが、受講された方々もさぞ大変であったろうと反省しています。美術館で翌年から始まった「館長トーク」には、こうした放送大学での経験を早速生かすことになり、毎回定員を超える受講の申し込みがありました。なかには当学習センターからおいでになった方もおられ、真摯に学ぶその姿には心から感動しました。

これまで、教える立場から放送大学と関わりを持ってきましたが、これから年齢を重ねていく過程で、学ぶ立場として放送大学に戻ってきたいとも考えています。

最後になりましたが、教室の設営や教材作成にご助力頂いた事務室の皆さんに、心よりお礼申し上げます。

放送大学東京足立学習センター客員教授

藤原 葉子



私が放送大学東京足立センターの客員教授に就任いたしましたのは、平成26年4月のことです。毎回、北千住駅からセンターまでの、歴史と食文化を感じさせる街並みを歩くことを楽しみにしておりましたが、早いもので5年が過ぎようとしています。この間、本務校との仕事の調整にご理解いただき、所長の柴眞理子先生をはじめスタッフの皆様、同窓会の皆様には、大変お世話になりました。学生の皆様の学習に対する意欲や知的好奇心には、いつも感銘と新たな視点を与えていただきました。皆様に心より感謝申し上げます。

私が担当した自主ゼミのテーマは、「食と健康」で、特に専門としている脂質栄養やビタミンなどの食品成分が健康にどのように関わっているか、というものでした。普段大学で行っている講義は、専門に食物を学んできた学生たちに、最新の研究結果を基にした生体内代謝や分子メカニズムなどを解説するのですが、放送大学の授業では、それらを踏まえ、実際の生活に役立てるときに必要な情報の取り入れ方を中心に、世の中に氾濫する食情報を科学的に正しくとらえることを目標としました。放送大学の学生の皆様は大変熱心で、幅広い年齢層の様々な職業の方からいただいた多くの質問や意見は、大学内で教育をしているだけでは気が付かなかった多くの学びとなりました。そして、私のような基礎研究者が、自分や関連の研究結果を正しく世の中に使えるように発信していくことの重要性や、そのためのつなぎとなる教育が必要であることを認識できたことは、新たな研究教育活動の一部となりました。学生の方から「先生の今日の話はどのように勉強したらよいのか。どの本を読めばいいのか。」と質問されたことから、これまでの科学論文とは異なる分野での本の出版にも至りました。

超高齢化社会を迎えたわが国は、医療費や介護の問題から、一人一人がなるべく長く健康を維持し、自立して暮らしていけることが重要です。健康に関する情報を「入手」し、「理解」し、「評価」して「活用」する能力のことをヘルスリテラシーといいます。たとえばヘルスリテラシーの高い人は、病気についての知識を持ち、医師とのやり取りで治療法を判断し、自分で納得のいく良い治療を受けることができるでしょう。食べ物と健康に関してはテレビやインターネットを通じて多くの情報が発信され、そのたびにブームもおきますが、自分にとって本当に必要な活用すべき情報はどのようなものでしょうか。受講生からの質問は、まさしくヘルスリテラシーを高めるためにはどうすればよいのか、ということですが、情報を理解するための幅広い知識は、放送大学で行われている様々な講義で得ることができます。それらを基盤として、評価するためのポイントをおさえつつ自分の生活に活用していくことで、情報に惑わされない健康で豊かな生活の維持につなげてほしいと思います。5年間本当にありがとうございました。

退任の挨拶

放送大学東京足立学習センター客員教授

安田 次郎

2014年4月から客員教授を務めさせていただきました。5年の任期を無事満了して2019年3月に退任となります。

私は日本中世史(平安時代後期から戦国時代)を勉強してきました。日本史は、はるか昔の古代史や身近な近代史は人気が高いのですが、そのあいだの中世史や近世史となると注目度が下がります。とくに中世史は、国や社会の枠組みがはっきりしないからよく分からないとか、同じような「○○の乱」の繰り返しでつまらないなどと散々なことを言われることもあります。それで中世の話など聞いてくれるひとがいるのかなと不安な気持ちをもって着任しましたが、まったくの杞憂でした。放送大学の学生は、世間一般の二十歳前後の学生と比べて好奇心や意欲が強いと聞いていましたが、まさにその通りで、公開講座(自主ゼミ)では毎回熱心に聞いて下さる多数の受講者に恵まれました。話しをしたあとで必ず質問がいくつか出るというのも放送大学の特徴だろうと思います。お陰で、自分が話したことのどこが説明不足だったのか、受講者は何に興味を持ったのかなどをその場で直ちに知ることができました。

面接授業は、着任二年目から「中世の古文書を読む」というテーマで始めました。これは少なからぬ数の人たちが、できあがった歴史(叙述)よりも、それができてくる過程、つまり生の史料やその取り扱い方、読み方、得られた情報の整理や分析の方法などに興味をお持ちだということに気づいたことによります。本格的に歴史の研究法を身につけるのは、一単位にすぎない面接授業ではとても無理ですが、入り口辺りにはご案内できるかもしれないと考えました。中世の古文書は変体漢文といわれる日本風の漢文(和漢文)で書かれていることが多く、本当の漢文とは読み方が違うところがあります。また現代の我々にはなじみの薄くなった正字(旧字体)だけでなく、異体字(異体文字)とよばれる変則的な書体もよく使われています。慣れるまで少し面倒なのですが、私が予想した以上に古文書の解読・解釈は皆さんに楽しんでいただけたようです。受講者のなかには近世文書に習熟しておられる方もおられ、中世と近世の違いについて貴重なご指摘を受けることがあり、いい勉強になりました(面接授業は本年秋にもう一回あります)。

5年前のことを思い起こすと、足立学習センターへの最初の連絡は、「入院して手術することになったので、4月の入学式には出席できない」というものでした。最初からこれでは今後どうなることやらと所長以下学習センターの皆さんにはご心配をおかけしたことになると思います。あらためてお詫び申し上げるとともに、なにかと支えて下さったことに感謝申し上げます。ありがとうございました。



就任の挨拶

放送大学東京足立学習センター客員教授

宮本 信也

平成30年度より客員教授に就任いたしました。

私は、もともと小児科医で、発達行動小児科学を専門としています。子どもの発達や行動面、そして、ある程度心の問題に小児科の中で対応するという分野です。精神科との違いは、原則として、心の病気は対象にならないという点です。心の病気の代表は、統合失調症やうつ病などですが、こうした病気の場合は、たとえ小学校1年生でも精神科の対象となります。一方で、子どもで見られる発達や行動問題の多くは病気ではありません。例えば、発達障害や不登校などが相当します。しかしながら、こうした問題を抱える子どもたちは、毎日の生活の中でうまくいかないことやできないことが多く、そうした状況から困っている状態や悩みを持っていることが少なくありません。その意味では、理解と支援を必要としているといえます。疾患(病気)と見なすことが必ずしも適当ではない子どもたちの発達や行動の問題について、医学的視点から支援と研究を行う分野が発達行動小児科学といえるでしょう。

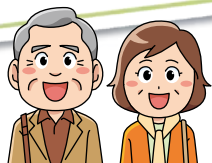
発達行動小児科学の中で、私が特に取り組んでいる問題は、発達障害と子ども虐待です。発達障害は、今では一般の方でもその名称をご存じなほどにわが国では広く知られるようになりましたが、いまだに発達障害は病気だと思われるいたり、自閉症は人との関わりを持たずに一人の世界に閉じこもっているというイメージがあったりなど、まだまだ誤解されていることも少なくありません。病院で発達障害の診療を行っているのに、奇妙に聞こえるかもしれませんが、私は、自分の患者さんやそのご家族には、発達障害は病気ではなく、基本的には、医療の対象というよりは療育や教育の対象ですとお話することが少なくありません。発達障害の中では、自閉スペクトラム症(自閉症などを今はこのように呼びます)における特性の臨床的解明を目指して、診療と臨床研究を行っています。

子ども虐待は、子どもたちの身体と心に大きな影響を与える問題です。わが国の児童相談所で相談される子ども虐待件数は、毎年増加しています。そして、毎年、80~100人の子どもたち、平均しますと毎週2人前後の子どもが虐待で死亡しています。虐待を受け続けた子どもたちでは、精神障害や犯罪行為を持ちやすいことが知られています。子ども虐待の問題に小児期に完全に対応できるようになれば、精神科や警察で対応する人たちの人数が減るのではないかとさえ言われることがあります。少子化のわが国では、子ども虐待に適切に対応することが求められていると考えています。

大学の授業では、こうした問題をみなさんと考えていければと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

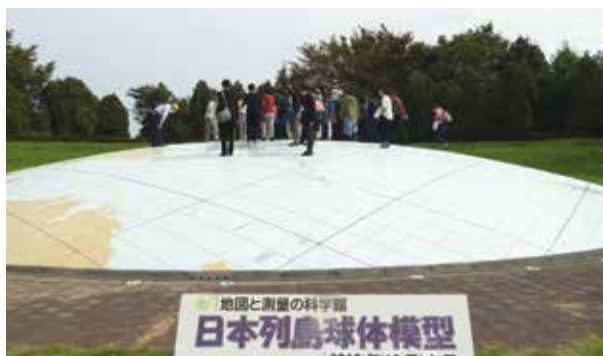


学生研修旅行



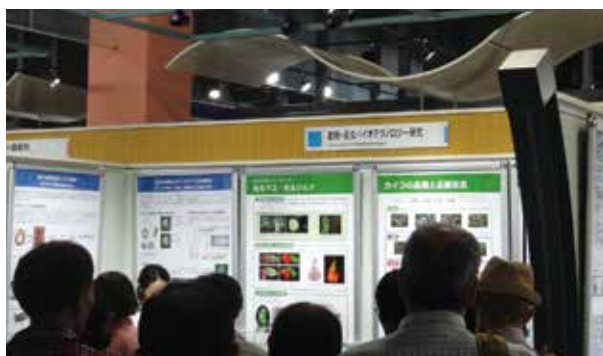
平成30年10月4日(木)に2018年度学生研修旅行を実施しました。当日は申込者全員の学生28名が参加しました。

今回は「つくば研究学園都市を巡る」というテーマで茨城県つくば市にある科学館や研究紹介施設を巡りました。①地図と測量の科学館②サイエンススクエアつくば③食と農の科学館④サイバーダイナスタジオの4施設を見学しました。



①地図と測量の科学館は国土地理院の附属施設で、説明員の方に施設の案内をして頂きました。特に屋外にある20万分の1スケールの巨大な日本周辺の地球儀は自分で上ることが出来るため、多くの方が実際に上って日本の国土と周辺の様子を確認していました。その他、江戸時代に実際に歩いて日本地図を作製した伊能忠敬に関する展示なども豊富にあり、学生さんからはもっと見学したかったといった声もありました。

②サイエンススクエアつくばでは、研究成果として展示されていたアザラシ型のセラピーロボット「パロ」を実際に抱くことが出来たため、皆でその抱き心地を確かめて癒されていました。



③昼食後、食と農の科学館では、農業の歴史に始まり、遺伝子組み換えによる青いバラの誕生の説明や昆虫を活用した農薬を使用しない害虫駆除など、食と農に関する幅広い内容について学ぶことが出来ました。

④サイバーダイナスタジオは「HAL」と呼ばれる、装着することによって身体機能を拡張・増幅・補助することができる世界初のサイボーグ型ロボットを製造している会社の体験施設です。ここでは、実際に人間の体の動きにリンクして動かすロボットの操作体験を希望者全員がすることが出来ました。自分の腕の動き通りに動くロボットの腕を見て「おー、動いた!」といった驚きの声が上がって非常に盛り上がりしました。



つくば研究学園都市を巡るというテーマで上記4施設を見学し、無事研修旅行を修了することができました。つくばには「つくばサイエンスツアーバス」(料金:500円(1日乗り降り自由))というこれらを含むコースを回るバスが土日には走っていますので、皆さんも見学されてみてはいかがでしょうか。

通信指導について

通信指導とは？

放送授業と一部のオンライン授業科目について、授業の一部として各学期の途中に1回一定の範囲で出題され、その答案を提出して担当教員の添削指導を受けることです。

通信指導の結果により、単位認定試験の受験資格を得ることができます。

未提出あるいは期限までに提出しなかった場合は、評価対象とはなりませんのでご注意ください。

問題は原則、印刷教材(テキスト)と同時に送付されます。内容は、前半の一定の範囲で出題されます。

提出期間

【郵送】5月21日(火)～6月4日(火) 《大学本部必着》

【Web通信指導】5月14日(火) 10:00～6月4日(火) 17:00

(提出期限を過ぎると受理されませんので余裕を持って提出してください。)

添削結果 返送時期

2019年6月末～7月上旬

《添削結果が以下の未着期限までに届かない場合は、大学本部にお問い合わせください。》

① 択一式科目(併用式科目の択一部分)…… 7月 8 日(月)

② 記述式科目(併用式科目の記述部分)…… 7月19日(金)

面接授業のごあんない

面接授業とは？

放送大学では、全国の学習センター等において、年間約3,000クラスの「面接授業(スクーリング)」を開講しています。面接授業は、直接教員から指導を受ける機会として重要であるばかりではなく、学生同士の交流・啓発の場としても広くご活用いただいております。他の都道府県の面接授業を受講することも可能です。

全科履修生の方は、卒業するために面接授業(またはオンライン授業)の単位を20単位以上修得する必要があります。選科履修生・科目履修生の方は必修ではありませんが、ご自身の学習したい内容に合わせて面接授業を受講することができます。(面接授業は1科目1単位です。)※教養学部のみ

—2019年度第1学期面接授業追加登録について—

科目登録決定後に空席のある科目については、追加登録期間中に科目の登録を追加することができます。授業を実施する学習センターにより登録の手続きが異なりますので、必ず授業を実施する学習センターに確認してください。

追加登録 日程

空席発表

4月13日(土) 12時

空席状況は放送大学ホームページと
学習センター掲示板等でお知らせします。

登録期間

4月19日(金)～科目ごとに定められた受付期限日まで

4月19日(金)15時以降、システムWAKABAで空席の状況をリアルタイムで確認できます。(予定)

追加登録初日

4月19日(金)

午前10時までに来所の方を対象に抽選、それ以降先着順。

※追加登録の際の持ち物……【学生証】(コピー不可)【授業料】1科目あたり¥5,500(現金のみ)

郵送による申請

4月20日(土)から郵送(現金書留)による申請も受け付けます。
(受付初日の4月19日は窓口申請のみとなります)

◎面接授業科目追加登録申請書

◎学生証のコピー

◎所定の授業料

◎返信用封筒(宛先明記、82円切手貼付)

以上を全て同封のうえ、現金書留によりお送りください。(ただし、希望者多数の科目は、直接来所の方を優先とします。申請は、科目ごとに定められた受付期限日までとなります。)

東京足立SCでは
59科目が開講
されます!!